


明治四十二年十月十五日



卯花

第參拾五號

中央歌文會出雲平田支部



	ふ
	4-5
奥原氏	86705
購(寄)研・他	島根女子短大 図書館

○船 中 月

野崎英夫

照る月をあるしごすれは幾泊

ごまりなれさる舟も安しな

○女 郎 花 (今様)

野崎薫子

心なしとないひそひと 賤かと鎌に懸けむより  
 手折りてれのれ文机の はなごなかめむ女郎花



○紫 式 部

村上壽夫

紫の朱うはふごは名のみにて

きみか色こそ正しかりけれ

○源 頼 政

同

いまはこて敷きしあふにききほひ暁

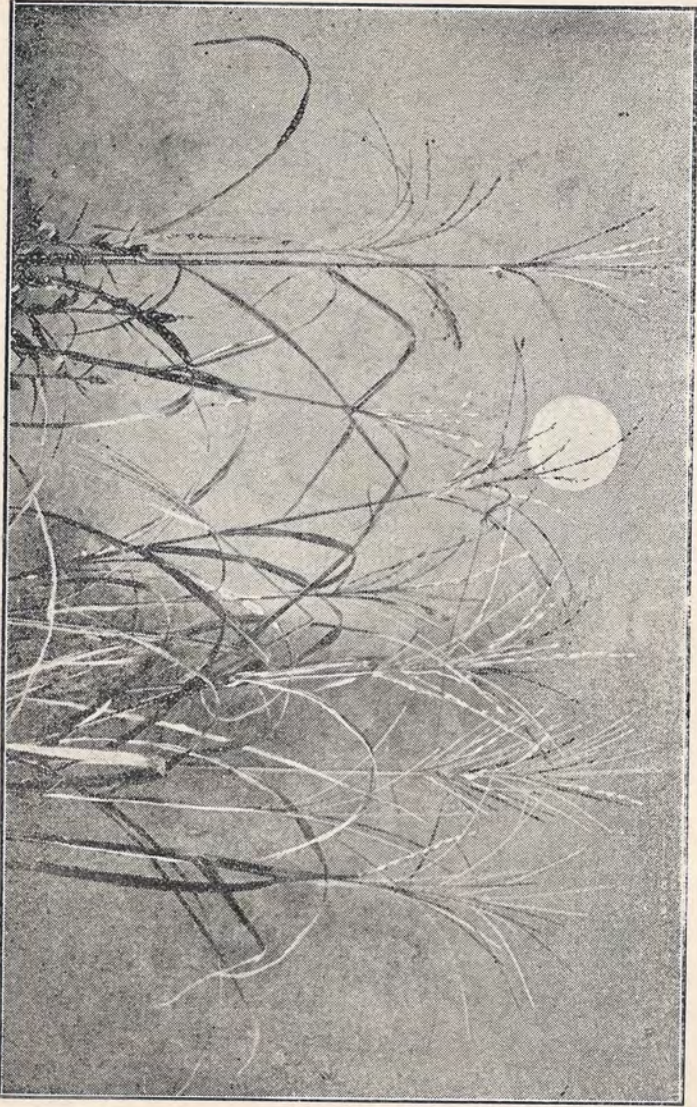
伊豆のうら波木曾の山かせ

○をりにふれて

同

浮雲のはかなき空のゆふ雲雀

あかるたつるも世にこそ有けれ







英夫

ぞ記はある

とを

七草の

中には入る

千くさ乃花は秋乃野よ

卯之花第參拾五號

○仲秋望夜雅會

十月例會を取越したる觀月會は九月二十九日來年間年枝の寓に開かる、待ちに待ちたる此良夜、嗚呼無情、一天密雲におほはれ、雨さへそぼ降る、雅友の胸塞かり、涙の落つるも、ことわり、會せしは櫻桃、善紀、春草、直愼、三里の途を遠しとせすして來れる文枝、水石、年枝、忠久、和久の九人にて、兼題山時雨、離縁、橋霜、虫聲、稀、海邊秋望の詠草互評は例の如く、晚餐を共にし、さて今宵の限なき憾みは、各々三十あまり一文字となりぬ、月無くして言の葉の花咲けるも、いとをかしく、興味いよいよ、加はり更のたくるを覺わざりき。

從來支部幹事二名なりしが月を逐ひ會友の増加を來たし事



務の繁忙は幹事増員の必要となり今回定員を四名に改め左記の二氏を満場一致にて推薦せり。

幹事 原 保定 同 小村銀之助

●仲秋無月のまどろに

そらに似て心もはれぬ望月の夜雨に思ひいやまさりけり 善紀  
 待詫し今宵を知るや知らさらん雲の岩屋に月かくるとは 櫻桃  
 うらめしき限也けり望の夜に月をかくして雨のふるとは 文枝  
 待わひし今宵の月をふりこめて影たに見せぬ雨そつれ無 直慎  
 月は今いつこの空に宿るらん待ちにし友は訪来しものを 忠久  
 人皆の待ては殊更かくるらんあまりつれなき望の夜の月 年枝  
 望月のいつはあれ共一年の今宵のあめそつれなかりける 水石  
 月なくて千々の思をまさりける小雨ふる夜の空を眺めて 和久  
 をやみなく降る雨さひし望の夜はかこち顔なる歌の友垣 彩雲  
 外山なる梢はあめにぬればて、月松虫のこゑのみそきく 麻山

○川紅葉 (本會十月分)

龍田川水にうつろふもみちは、昔を語るにしきなりけり 石橋櫻桃  
 物洗ふ小川の紅葉色ふかみ手は朱にそむこ、ちこそすれ 同  
 筏士はけふも下りて川上の岸のもみちのうはさしにけり 池田正躬  
 川添のはしの梢もみちして下行く水のうるはしきかな 同  
 川風に吹かれてちりし紅葉はの流の末はみやこなるらん 原不吝  
 染めわけし紅葉うつろふ川の瀬は錦を洒す心地こそすれ ●原 彩雲  
 きて見れば梢あまねく紅葉して時雨ときどゆ山川のおど 同  
 龍田川流るゝみつの清ければもみちの色も底に見えけり 西村晚香  
 谷川の水くれなるに見ゆる迄峯の紅葉のかけそうつれる 同  
 川波にもみちの錦さらしゝは立田の姫のときしひもかも 本多直慎  
 川にしき紅葉のあやと浮く草は錦のうへの花にさりける 同



川波にかけをひたして檀紅葉いよ／＼深き色にみわたつ、  
 小村水石  
 あすか川岸の紅葉のこくうすくうつれる影や淵瀬なる覽  
 同  
 川つらの水に映るふ紅葉は、誰かたりなせる錦なるらん  
 綿貫閑溪  
 心なき筏しさへも棹どめてしはし見とる、岸のもみちは  
 同  
 くれなるに水をく／＼りし龍田川今も昔の名になかれけり  
 高橋香雪  
 川添のはしには、そこに紅葉して水より深き秋のいろかな  
 同  
 川水もくれゆく秋におくれしと紅葉誘ひていたちに鳧  
 玉木雪華  
 こゝかしこ水の面をむる紅葉はの日毎／＼に色まさり鳧  
 同  
 吹きおろす峰の嵐に紅葉ちり谷間の川をそめてなかる、  
 常松曉月  
 夕日さす山の紅葉の色はわて秋すむ川にかけそと／＼むる  
 同  
 おり姫のありかいつこと、ふ迄に川は紅葉の錦なかしつ  
 常松晋宏  
 小倉山ふもと流る、川水に匂ふゆふ日はもみちなりけり  
 永江峯穹  
 紅葉ちる山より出つる谷川は水の流れもそめてけるかな  
 同

吹きちらす嵐を川の時雨にて瀬々を色とるあはれ紅葉は  
 ●黒田麻山  
 川水のとまらぬ秋をいかにせん紅葉流る、昨日今日かな  
 ●來間年枝  
 散る花を春はをしみし大井川紅葉のふちはこの頃にして  
 同  
 紅に川水く／＼るもみちは、なかれ／＼てしからみとなる  
 山岡文枝  
 夕日さす川邊にたてる柏木のかたわしくれてちる紅葉哉  
 同  
 谷川のよとみに紅葉あやなしてまたも人目を喜はせけり  
 山根碧雲  
 およそ世の人の命もかくあらん紅葉は川の藻屑とそなる  
 同  
 川の面につたの紅葉のかけおちて水の底にも秋は見ぬ鳧  
 手鏡鏡水  
 川水に浮ひなからも流れぬは岸の紅葉のにしきなりけり  
 同  
 山川の岸の紅葉は色まして水の面あかく見ねにけるかな  
 青木素翠  
 龍田川紅葉の木かけしるしにて霧たつなかれ小舟さす也  
 同  
 朝霧のたえま色つく大井川岸のこすゑやもみちしぬらん  
 木村翠月  
 大方の秋のかたみは山川の瀬々を色とるもみちなりけり  
 同



白糸の瀧の流れの末かけてにしきおり出す秋のみちは ●木佐和久  
 こく薄く紅葉の色のうつるみれば川こそ秋の鏡なるらめ 同  
 眺むれば船も筏もくれなるにたつた川原にちる紅葉かな 木村つね  
 山川の清き流をせきとめてからくれなるにちる紅葉かな 同  
 瀧野川流るゝ色は佐保姫の千々にそめにしにしき也けり 元井素居  
 あつさ弓春の花にも色まして川邊に並ふはしもみちかな 同  
 山姫のおりし錦を谷川にさらすとはかり見ゆるもみちは 角 清矣  
 (●印終身會友)

●口は禍の門といふ事を (本會十月分)

争も家のやふれもみな人のつゝしみ足らぬ口そもどなる 石橋櫻桃  
 一言の舌のかへしも心せよ悔いてかへらぬ事もあるなり 同  
 秘事を君にはかりともらすこそ禍まねくもどぬなりけれ 池田正躬

四つの馬も及はさり梟徒にくちはしりたるあとを追ふ共 池田正躬  
 一口の誤り言か種となりかくもくるしき身とはなりつる 原 不吝  
 禍の入るも口なり吐くも口深くつゝしめ世をわたるひと 原 彩雲  
 慎めよ口でふ門をくゝりなは悔てかへらぬ吐きしむた言 同  
 熊鷹のよし羽たゝきはすこく共鳴すは雉のいかで打れん 本多直慎  
 わさはひの入るも出るも皆人の心ひとつのうちに社よれ 同  
 心して言ふへかりけりまか事を生出す門の口とし思へは 小村水石  
 くちなしの色の黄金を見ても知れいぬ社身の寶なりけれ 同  
 一ひらの言の葉かけに芽をふきていよゝ生立つ禍のたね 綿貫閑溪  
 うかゝと口はしりたる言の葉の禍招くもとならんとは 同  
 言魂の幸はふ國の人なからなとわさはひの口よりそいつ 高橋香雪  
 くち車のせてそはこふ禍の門には得こそ入らさらめやは 同  
 かはかりに此身をせむる禍の口よりいてしと思かけきや 玉木雪華



受けて後それと知られぬ禍の口より出しと今はくいつゝ  
 何人も一度口を出しぬれはいかにくゆるもせん術そなき  
 禍はくちのかとより出つれ共つゝしまさるは人の身の常  
 くろかねの戸さしより尙心せよくいてかへらぬ言の葉門  
 心して言はいふへき物ならん善きも悪きもくちに社よれ  
 心してもものしいはすは禍を招くもどゐなるそうたてき  
 わさはひは口より入ると古の聖のことはけに社ありけれ  
 大くちをひらけは来る禍の門の戸さしはかたくあらなん  
 四つの馬も舌に及はぬ悔あれはよく慎みて物は言ふへし  
 禍のはな咲く門は言の葉のしけきわか身の口にこそあれ  
 言の葉の花咲き出つるくちをこそ禍まねく門といふらめ  
 悔ゆる共せん方なけれ今更に常につゝしめくちかさの人  
 わさはひを恨むる勿れ皆我の口より出てし事と知れかし

玉木雪華  
 常松暁月  
 同  
 常松晋宏  
 同  
 永江峯穹  
 同  
 來間年枝  
 同  
 山岡文枝  
 同  
 山根碧雲  
 同

争のたこれるたねも僅なる言葉のはしのたかへなりけり  
 かくすへき事さへ今は顯れて人のうはさとなるか悲しき  
 告くるなど契りしものを欺きて禍まねくあさましの身や  
 禍のたこるは何をもとなれやつゝしむへきは口に社あれ  
 徒に口なひらきそものいへは夏もくちひるさむき世の中  
 鳴かさらは打たれましきを愚にも死を呼ぶ雉子哀也けり  
 こゝろせよ女童の口よりもたもはぬ咎のおそひ來ぬれは  
 一言をいひはなちたる後よりや駒も及はぬ悔のこすらん  
 もの言へは壁に耳ありいつしかに身の禍の門となるらん  
 身にうけしこの禍のもとへは口は門てふ事のおもはる  
 禍はいかに起ると人間はゝいたつらに言ふ人のくちひる  
 井戸端につとひし妹の小口より禍たこるものごしらすや  
 禍は多く口よりおこるなりつゝしむへきは言の葉にこそ

手鏡鏡水  
 同  
 青木素翠  
 同  
 木村翠月  
 同  
 木佐和久  
 同  
 木村つね  
 同  
 元井素居  
 同  
 角 清矣



○ 犬

(初學十月分)

よそに鳴聲をそろしく聞ゆれど門守る犬は安けかりけり  
白波のさわかぬ御代はいつこ共門守る犬も稀にこそなれ  
夜もすから門を守りて何となく心強きは犬にそありける  
情にはけものもやさし門守る繫くとなしに去りかぬる犬  
行かへりたくり迎へて犬すらも主にしたかふ道や知らん  
汝はかり千里のよそに捨る共返り來ればやいぬと云らん  
遠ほえの聲さひしくも聞ゆなりいつこの犬の夜守るらん  
尾を垂れて哀訴ふやせ犬はさすか追はれも叩かれもせず  
呼へはほぬ招けは袖にたはむれて犬は人より陸しけなる  
わか宿はよなく、犬の門もれば結も夢路もやすけかり鳧  
家々に戸さし忘るゝ御代にあひて心やすくも眠る犬かな

石橋櫻桃  
池田正躬  
原 不吝  
原 彩雲  
西村晚香  
本多直慎  
小村水石  
綿貫閑溪  
高橋香雪  
玉木雪華  
常松曉月

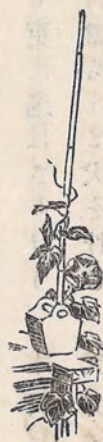
人音に子を惜みつゝたや犬の驚くさまのいちらしきかな  
飼ひ主の恵み忘れず宵の間もやともる犬のなつかしき哉  
門守る犬たのもしや人にして犬にもたどる人たほき世に  
年まねく飼とはすれど時ありて主の手をかむ犬もあり鳧  
めてられし恵忘れぬ犬ならめぬしを迎へて門にたちつゝ  
親犬のかこち顔なる目のあたり知らす小犬ははね廻ける  
かり人のえ物尋ねて深谷をこえ行く犬をゝしかりける  
夜は更てうき世淋しき丑みつにうれしくきこゆ門の守犬  
盗人や追ひ逃しけん山道の行く手にたかし犬のとほゝえ  
群木立くゝりて狩れる獲物をは主に捧くる犬そめつへき  
夜を守る手飼の犬にみちひかれ關路も更に迷はさりけり  
夜をこめて門の戸守るつとめをはわれ當らんと犬を佇む  
老いはてし犬といへども門守の功よみして飼ふや幾とせ

常松晋宏  
永江峯穹  
黒田麻山  
來間年枝  
山岡文枝  
山根碧雲  
手鏡鏡水  
青木素翠  
木村翠月  
木佐和久  
木村つね  
元井素居  
角 清矣



○朝顔

(八月分)



(天) いさけさはいつれの花を文机の 池田正躬

うへにたかまし鉢の牽牛花

(地) 罪をつみ恥をかさねて長らふる 木村翠月

ひとは知らすや牽牛花の花

(人)

頼なく病みてしをれば牽牛花の 玉木雪華

さくつかのまを嬉かりける

(以下三点)

朝なく咲かはりつゝなかくに盛久しきあさかほの花 小村水石

朝いする人は知らしな露に咲き露にしをる朝かほの花 山岡文枝

種々の花にすくれて新しき花のさかりはあさかほのはな 元井素居

中垣のうらも表もへたてなく咲くそうれしき牽牛花の花 同

(以下二点)

露のまを己か命とあはれにも葉かくれに咲く牽牛花の花 勝部篤貞

朝なく目覺草ともなりに覺垣根にさける牽牛花のはな 同

やよ子等よ花をな摘みそ朝顔の露のひるまも待たぬ命を 黒田麻山

仇に咲く花とないひそ牽牛花は垣間見し夜の後あさかほの友 同

朝戸出の庭の眺めのいと涼し露にはゑむ牽牛花のはな 木村翠月

誰かいつうゑにし種を牽牛花の床しく咲ける庭のそて垣 河原文孝

咲きそめし庭の垣根の牽牛花や露のなさけを色に見せ筒 玉木雪華

あす咲かん蕾かそへて夕よりまつもたのしき垣の牽牛花 池田正躬

袖垣の露のひぬまを命にて名残をしきはあさかほのはな 本多直愼

うなゐらか朝いのくせも牽牛花の花にひかれて改まり覺 同



垣にはふつる長けれど咲く頃の盛みしかき牽牛花のはな  
 白露の玉めつらしく咲出て、朝いゆるさぬ牽牛花のはな  
 都にて種を求めし牽牛花の咲き初めにけるけさの嬉しさ  
 我門のまかきに咲ける牽牛花は訪ふ人毎にめてにける哉  
 朝いする宿の子ら迄とく起きてめてはやす也牽牛花の花  
 老いぬればたゝに待たる、東雲の白みて咲ける朝顔の花  
 明日は又いくつか咲くとうなゐらか蓄數ふる牽牛花の花  
 朝なく、眺むる度に咲き出てん花のあすのみ數へ社すれ  
 白露を命とさきて世の中のはかなさ見するあさかほの花  
 色形とりくをかしあさかほの種は一つと思ひしものを  
 同 來間年枝

●●正誤  
 卯之花三十四號二三頁の四十二年兼題廣告の内毎月分  
 兼題を本會支部共に其月の十日〆切とせしは誤りに  
 て本會分は必らず其前月の十日〆切に付此に訂正す

船 中 月

(九月分)



(天)  
 のり出てはてしも知らず漂へは  
 心つなくは月にそありける  
 木佐和久

(地)  
 ゆけとく船を離れぬ影見れば  
 月もこよひののり合にして  
 高橋香雪

(人)  
 來し方の思ひも深くなりにけり  
 ふな窓たかく月をなかめて  
 黒田麻山

(次点)  
 月影のうつる川瀬に舟とめて黄金の波もむすひけるかな  
 山岡文枝  
 漕きいてし舟は流れにまかせつ、曉までも月を見しかな  
 常松曉月



わたつみの潮路を遠く乗出せは月そうれしき友と也ける  
 行きくれて船路に今宵あかし瀉折しも晴る、秋の夜の月  
 言葉の花も匂ひてのどかなる舟のまどぬを月のほりけり  
 波の上にゆられく、てかち枕いをねぬ船の月を見るかな  
 照りわたる月をのせつ、舟こけは光あまりて玉そ流る、  
 乗る船に玉もちりつ、水銀の上こくと見ゆ月すめる夜は

玉木雪華  
 木村翠月  
 飯塚雲水  
 池田正躬  
 本多直愼  
 同

(以下三点)

船出して月を見るこそ樂しけれ秋のうさをも波に流して  
 よる波の音もさやかにとま漏りて心さへ澄む秋の夜の月  
 わたの原波間にしはし船とめて心ひろくも月を見るかな  
 照る月は玉とも見えて清見瀉こ、ろさへ澄む船の中かな  
 乗船の苔よりもる、影きよし今宵そ月はもなかなるらし  
 すみ渡る月をのせつ、沖かけて船は黄金の波間をそゆく

山岡文枝  
 西村晚香  
 永江峯穹  
 青木素翠  
 玉木雪華  
 高橋香雪

わうの湖波にまかせて望の夜の月見小舟を浮へつるかな  
 (以下二點)  
 雲はれて空に澄みたる月影を友とは見つ、わたる灘波江  
 心あての湊をさして行く船もさやけき月そたより也ける  
 舟ひとか棹のしづくに月かけの碎けて清き舟あそひかな  
 すみ田川きよき流れに舟うけて友と月見る夜半の樂しさ  
 さえわたる月の光を身に浴ひて故郷たもふ船のうへかな  
 久方のみそらの月を友として舟路さやかにわたる秋の夜  
 さし上る月にうたふもれもしろく波にまかせて遊ぶ舟哉  
 はからすも友にさそはれ舟出して波より上る月を見る哉  
 水そこの魚の數さへ見ゆるまで釣する舟をてらす月かな  
 よもすから清き月さへのせて行く明石の浦の蟹小舟かな  
 照る月はいつこもたなし光にてかはる眺は舟にこそあれ  
 とま舟のとま引きあけて吾れも亦人に遅れす月を見る哉

隣間年枝  
 角 清矣  
 雨森よし  
 原 不吝  
 西村晚香  
 綿貫閑溪  
 同  
 常松晋宏  
 石橋櫻桃  
 永江峯穹  
 青木素翠  
 常松曉月  
 同



外國をさしてそ急く船の上に見るも勇まし澄みわたる月  
 わたつみの千里の波に船出して月澄みのほる故郷のそら  
 さ夜更けて漁火ほそく也に鼻とま漏る月の影さやかにて  
 ゆくさきの望もとほき千里海船路はるけき月を見るかな  
 ふるさを千里の外の波枕起きてなかむる望の夜のつき  
 川岸につなける船にこましきて海人も今宵や月を見る覽  
 海原に船をうかへてなかむれは心も月もすみわたりつゝ  
 心さへすみこそ渡れ月見舟こきかへらしな小夜更ることも  
 水の上にかゝやくやかて船人の空をなかむる月の影かな  
 秋の夜の月の光をたゝへたる湖のうへゆく船のたのしさ  
 簾の川の清き流れに棹さしてななめつきせぬ秋の夜の月  
 思ひきや船のなかにて新高の山の端いつる月を見んとは

元井素居  
 原 彩雲  
 同  
 黒田麻山  
 木村翠月  
 池田正躬  
 小村水石  
 同  
 木佐和久  
 來間年枝  
 木村つね  
 同

○野 女 郎 花 (九月分)



(天) 秋風をつらき物とは知らさらん

常松 曉月

(地) いつしかなひく女郎花かな

山岡 文枝

(人) こゝろは誰に靡き初むらん

池田 正躬

(次点) 折りてけり野邊の伏屋の女郎花

うちすてかたき色に匂へは

女郎花あたる色にあくかれて人の心や野邊によるらん  
 秋の野につらく吹かるゝ女郎花なひく心や苦しがるらん  
 ものいはむ色も見えけり女郎花心ありけの露もやとりて  
 秋の野になまめきたてる女郎花仇し風には靡かさらなん

西村 晚香  
 玉木 雪華  
 原 彩雲  
 黒田 麻山



いはぬ色に匂へる野邊の女郎花いかなる花の心なるらん  
小村水石

(以下二点)  
野に山に咲きそゝひけり女郎花都の市にやかてにははん  
木村つね

誰か爲に咲くか野末の女郎花道ゆく人に折られもやせん  
同

秋の野のゆく手に咲ける女郎花たふ名隣れに見え渡る哉  
來間年枝

いかなれは夕風戦く仇し野になまめきたてる女郎花かも  
同

口なしの色に匂ふもゆかしきやひとり野中に咲く女郎花  
木佐和久

秋の野の千草のなかの女郎花ひとりしめたる黄金色かな  
同

秋の夜のさひしき野邊に女郎花誰をまつとて獨たつらん  
本多直愼

虫の音のほそ野の道をたどり來る我袖ひきて女郎花たつ  
同

露さへに匂へる野邊の女郎花行かふ人をとめぬはなし  
高橋香雪

神垣の花より殊になまめきて野邊にそ立てる女郎花かな  
同

をみなへし富士の裾野をこかしこ靡く姿に心ひかる  
飯塚雲水

秋の野の花はいろく咲くか中に姿ことなる女郎花かな  
原 彩雲

あはれにも露たくの邊の女郎花たれ招くらむ秋のあさ風  
黒田麻山

いめ人の伏見の野邊の女郎花はなの下紐たれにとくらん  
木村翠月

霧こめしの邊に紐とく女郎花晴れなは如何たもなかる覽  
同

秋の野のつゆを分けゆく袖ことに匂こほるゝ女郎花かな  
池田正躬

暮るゝ野に見いたしにけり女郎花いさ持歸り鉢植にせん  
山根碧雲

秋風の吹き渡る野の女郎花誰を待ちてかなひくなるらむ  
元井素居

白露の玉をかさりて野の道になまめき立てる女郎花かな  
同

仇し野のあけ方近くたく露のれもけに見ゆる女郎花かな  
玉木雪華

むさし野の霧にへたゝる女郎花常よりもなほ心ひかるゝ  
常松曉月

よそほへる花の姿もあたし野に誰を待つとかか女郎花さく  
青木素翠

秋の野の千草の中の女郎花たか爲めにとかか咲き匂ふらん  
同

のつら吹く嵐になひく女郎花なまめく色のなつかしき哉  
山岡文枝



朝の原うち出て見れば秋風に吹かれてなひく女郎花かな  
 刈萱の中にましりて秋の野のたもむきそふる女郎花かな  
 にくからぬ姿なり鳧女郎花の邊に咲けるもいとほしき哉  
 今朝見れば咲き揃ひたる女郎花秋の野中の憐れさへ添ふ  
 女郎花の邊に匂へるさま見ればあたりの千草色なかり鳧  
 さき匂ふ千草の中にあはれにも隠るゝの邊の女郎花かな  
 秋風に吹かれてなひく女郎花姿やさしく咲きいてにけり  
 秋風の吹くもさひしきの邊行けは我まつ顔に女郎花咲く  
 朝露のあたし野に咲く女郎花すさむ風にも花みたるらん  
 あたし野に獨り残りし女郎花咲く秋風に伏しかちにして

西村晚香  
綿貫閑溪  
同  
石橋櫻桃  
永江峯穹  
同  
角 清矣  
原 不吝  
雨森よし  
同

課外

折にふれて  
よめる  
夜な／＼の月のしつこのこほりてや秋は黄金の玉結ぶ覽  
 故郷は目に見るものも聞くものも皆思出の種はかりにて  
 同  
秋 川 柚人の筏をなかすこゑすなり立きり深し木曾のたにかは  
 手錢鏡水  
朝 顔 あす咲かんつほみ數へて樂しきはふみ見る窓の朝顔の花  
 同  
社頭夕立 神のます社のもりの蟬のこゑふりしつめたる夕立のあめ  
 同  
同 夕立のそゝきて涼しうふすなの森の若葉に露をこほるゝ  
 飯塚雲水  
朝 顔 朝風に袖ふかれつゝ少女子のわり立つ園やあさかほの花  
 同  
虫 おしなへてきく虫のねは變らねといかに思を語るなる蘭  
 常松晋宏  
温 泉 ゆあみする験ありまの名におひて里に絶せず人の行かふ  
 同  
秋 風 小山田の鳴子の音ものどかにてたもとにすゝし秋の初風  
 綿貫閑溪  
七 夕 七夕の今宵一夜のちきりにて天の川原に逢ふやうれしき  
 西村晚香  
夕 立 かさなくて木陰にやとる少女子の袖や袂にかゝる夕たち  
 同  
撫 子 幾を度なさけの露をうけぬらし妹か垣根のなてしこの花  
 玉木雪華







小品

白芙蓉

飯塚雲水

眼はあいた。夢ではなくてふる里の家であつた。天はまだ明けぬ。戸外は露にぬれて物みな涼しくねむつてをる。清らかな平和な里である。世は永遠の静寂にかへつてをるのである。僕が嘗て植ゑてくれた白芙蓉、今は滿地にはびこつて、幾百の蕾を破る音、香を送る微風、さながら太古の曉である。僕は亡くなつた弟をつれて此の池畔に立ち、たつた一つの蕾が無聲の活動を意味するかのやう、綻びつ膨らみつした十年の昔を想起せずにはをられなかつた。しかし何だか夢のやうでならぬ。

淋しき夜

山根碧雲

僕の書齋、此頃來、メツキリ涼しくなつた、今宵も亦滅相暗い、ボンヤリしてをると途切れ〜の西風、それにつれて礫の様な雨が窓をうつ、庭の柳の葉か、バラバラツト散る、それが止むと、どこかで憐な虫のねが聞える、と思ふと、また、バラバラツトかくて秋の夜と、僕の命は、知らず〜更けて行くのである、無情々々、僕はシミジミト秋の淋しさを感じた。

夏休みの間、毎日一首つゝの歌よみあつめて

「一日一草」と題しける中に

本多直愼

松江なる友々文参りたれば　なさけある便まつ江の友の文得てし今日社嬉しかりけれ  
清水寺に詣てゝ　ひさかりも青葉したゝる清水は蟬のなくねも涼かりけり  
日御倚に詣て燈臺に登りて　ごもし火のみさき照して大神のみいつもいよ、赫にけり  
杵築看雲樓に雅會を催さる折に　敷島の道の友とち相見つゝ語る今宵はあけすもあらなん  
義勇艦を杵築灣に迎へて　國を思ふ心あふれて梅か香のふねを浮ふる波のうへかな  
本箱を求めければ　いにしへの玉の聲々ひめたきて明暮たのか耳やきよめん



○新入會友

大原郡神原村小學校

(勝良)

古瀬桂三郎

(黒田麻山紹介)

計七十九名

○雅號披露

出東村

(霞香)

小林貞太郎



▲本會十二月分兼題

歲暮兒童、古瓦

旅宿歲暮

▲支部十一月分兼題

隣家菊、深山紅葉

切十一月十日限

以鉛版代謄寫

平田輝光計印刷

競点題募集

歌文九月分(二九頁)に見わたる會友撰評競点題も盛に出詠せられたし

十一月分 紅葉を人に贈る (十月十日切)

十二月分 紅葉を贈られし人によみて遣はず (十一月十日切)